

# Talents

---

## ワークシェアリングの光と影

### 中村奈津子

夫に常々「勤続18年の俺より出世してるじゃん」と言われる、  
参画プラネット常任理事。  
「理事」の名前に恥じない活動を目指して、  
日々、  
昼夜(?)、  
奮闘しています。

“ひっぱり”だこへの対応

### 明石雅世

1989年に結婚、二人目を妊娠中に夫と死別。  
10年後、名古屋市東生涯学習センターで  
女性学を学び、NPO活動にかかわる傍ら、  
社会福祉活動、地域活動にも積極的に参加。

## わたしのプチ・チャレンジ

### 高島由美子

## 太平洋を越えて

### 伊藤静香

2年間のカナダ生活に終止符をうち、  
日本に帰ってきました！  
以前と変わらず迎えてくれた  
仲間たちとの再会に復帰の不安も解消。  
久しぶりの現場は刺激がいっぱいで、  
再び活動できることに  
胸膨らませています。

参画プラネットとの出会いが、  
偶然ではなく必然だと信じ、  
進化し続ける有能な(?)事務局スタッフ。  
早く数年後のわたしを見てみたいと、  
わくわくしながら活動しています。

# 太平洋を越えて

朝8時、夫を送り出したあと、パソコンの電源を入れ、Eメールのチェック。私の一日の始まりです。そのころ日本では、参画プラネットが指定管理者となっている名古屋市男女平等参画推進センターつながれっと NAGOYA の閉館時間を迎えます。夜のスタッフが業務を終えて、一日が終わります。そう、私は現在日本との時差が13時間あるカナダ・トロントに住んでいるのです。夫の仕事の都合でトロントにやってきた私は、「夫」か「仕事」か、という二者択一の選択をせず、「仕事」を続けながらも「夫」と共にトロントで過ごすことを選びました。インターネット技術の進歩は、海外にいてもパソコンを駆使しての「在宅ワーク」を可能にしました。

さて、「在宅ワーク者」としての私の業務は、主にウェブサイトの構築と管理です。「参画プラネットホームページ」や、つながれっと NAGOYA で開催されるイベント情報をお届けする「つながれっとクラブホームページ」は、実はカナダから発信しているのです。日本の仲間から届く情報を、トロントでウェブに乗せて発信。以前には考えられなかった方法ですが、こうした在宅ワークで多様な働き方ができるようになりました。「在宅ワーク」をすることで、私はカナダにいながら、日本のメンバーと共に活動をしているという気持ちを持ち続けることができます。朝、メールを送信すると同時に日本からタイムリーに返信が返ってくる時には、相手はるか海の向こ

うにいるのに、すぐ隣にいるような気がしてうれしくなります。(日本からのメールが海外で暮らす私にとって、どんなに大きな励ましになったことでしょう)

ところで、ホームページの「ホ」の字も知らなかった私の「はじめの一步」は、たった4ページのごく簡単な「参画プラネットホームページ」でした。自分の能力よりちょっとだけ背伸びしてあえてチャレンジするのが「参画プラネット流」。ウェブサイトの「プランニング&デザイン」という今まで経験したことのない分野に挑戦し、悪戦苦闘しながらも、独学でスキルを身につけ、徐々にページを増やしていきました。少し詳しい人ならば簡単にわかることも、まったく素人の私は、回り道しながらの到達です。時間はかかりましたが、一つずつ身につけていったスキルは、私の「ウェブサイト・プランナー」としての新たなキャリアになりました。この春には、つながれっと NAGOYA インフォメーションに設置された「チャレンジ・デスク」と連携して、「チャレンジ・デスク・サイト」も開設しました。皆様からのご意見をいただきながら、新しい展開をプラン中です。さらに、オフィシャルブログ「参画堂日記」では、個性あふれるメンバーたちのそれぞれの日記をお届けしています。参画プラネットに関する情報だけでなく、ごく普通の「妻」、「母」、「女性」としての日ごろの雑感や経験、お役立ち情報などが満載です。ぜひお立ち寄りいただけるとうれしく思います。

私はこの夏にカナダの生活に終止符をうち、日本に帰国の予定です。懐かしい「古巣」にもどる日を楽しみにしながら、カナダ生活を満喫しています！ 著／伊藤静香

## 「論文にチャレンジ！」

(ウェブ・サイトより転載)

### —あなたが、チャレンジしたのは？

国立女性教育会館(以下、ヌエック)研究ジャーナルへの投稿論文として事例報告論文を執筆しました。

### —論文執筆にあたり、どんな準備をしましたか？

まず「論文とはどんな書き方がされているのか」を知るために、女性学に関する論文をいくつか読むことから始めました。海外在住だと現地で日本語の専門的な文献を手に入れることは難しいので、インターネットで購入し日本から送ってもらいました。今までに書かれたヌエック研究ジャーナルもウェブ・サイトで読みました。ITのグローバル化で海外でも日本にいるのと変わりなく情報を手に入れる時代になったことを実感しています。

### —執筆にあたっての苦労はありましたか？

20,000字もの文章を書くのは初めてでした。書いても書いても、まだ終わらないような気がして、本当に書き上げることができるだろうかと不安になる時がありました。幸い時間だけはたっぷりありましたので、毎日執筆に没頭できました。

書いた内容が独りよがりにならないように、参画プラネットの仲間や夫に読んでもらい、感想やアドバイスを聞いて書き直すということを繰り返しました。論文執筆を通して、唯一身近にいて日本語で相談できた夫の存在は大きく、感謝しています。

書き上げるまでは大きな荷物を背負っているようで、書き上げたときの開放感は何とも気持ちのよいものでした。ただ、カナダから国際郵便がちゃんと日本まで届くかどうか心配で、まだ終わった気分にはなれませんでした。ちゃんと届いたとわかったとき初めて「これで完了」と晴れ晴れした気分になりました。

### —審査結果を待つ間はどんな思いでしたか？

論文を書き上げたことで、すべての整理がつき、とてもさっぱりした気分でした。事例はわたしひとりのものではなく、仲間との共有財産だと思っていたので、この論文が認められたらうれしいなあという気持ちはありました。

\*つづきは、<http://www.sankakudo.net/>にてご覧ください。

# “ひっぱりだこ”への対応

私の業務は、インフォメーション・事業企画運営の他に、システム（PC）管理、センターのホームページ管理、センター主催講座の名簿管理、センターメールマガジン配信・つながれっとクラブメールマガジン・今月のつながれっとの情報管理、など新しい業務を担うことになった。

センターホームページ管理に関しては、インフォメーションにおけるPC処理のほか、Word作成程度の腕前（？）であった私が引き継いだ。引き継ぎにさいしては、一語一句聞き逃さないようにメモを取り、何度も繰り返し聞き直したことを覚えている。

HTML文書を利用してのホームページ管理に、数学の方程式の如くただひたすら素直に文字とアルファベットを入力していった。

と同時に、主催講座の案内を別のシステムから入力してホームページにアップしていった。

4月当初は、パソコンとにらめっこ毎日が続き、パソコンにむかって「あー！」「えー！」「なんで?!」「どーして!?!」と、いたって真面目に話しかけている私がいた。

1ヶ月などあつという間に過ぎゴールデンウィーク明けには、4月から募集していたセンター主催講座の申し込み締切、抽選、名簿管理業務を行った。これも名古屋市から引き継いだ業務であった。この業務は名簿管理が重要である。人を扱う業務である

ため慎重でいなければいけない。受講料入金確認の電話掛け、キャンセル後の繰り上げ当選の電話掛けなど開館時間午前9時から午後9時の間に作業するのだが、私の勤務時間帯が、午前9時から午後4時までの平日のであったため、ほとんどの人が出かけている時間帯でなかなかつながらない。そのため、インフォメーション担当者や責任者へメモを残してお願いした。そして次の勤務の時、専用のBOXに報告メモが入っているのものでそのケアと確認処理を行った。

また、マンスリーの業務としてメールマガジンの配信作業があり、センター用とつながれっとクラブ用の2種を行った。センター用はセンター主催の事業を中心に、つながれっとクラブ用は指定管理者事業を中心に掲載するため内容が別になっている。

どちらも、毎月初めに配信するため、前月の最終週に原稿のたたき台を作成した。センター用メールマガジンは名古屋市の職員との相談・報告・確認をきちんとしなくてはいけない。つながれっとクラブメールマガジンは、別のメンバーが原稿を作成しメールで送ってくるため確認作業を行っている。

メールマガジンは事業案内が命であり、センターホームページ管理ともリンクしているため、事業を把握するとともに名古屋市の職員とのコミュニケーションは欠かせないため、1日に数回は2階の事務室に足を運んだ。

そして、週に1度はインフォメーション

業務をおこなった。必要とあれば、AV機器の接続に、忘れ物の問い合わせがあれば探しに、3階の貸室へと階段を駆け上がった。私の動線が、時を刻む長針とともにインフォメーション、管理室、交流ラウンジ、生活アトリエ、印刷工房、駐車場、2階の事務室、3階の貸室へと動いていた。

指定管理者主催事業においてもスタッフとしてかかわり、プラズマの配線、パワーポイントのセッティング、マイクテスト、録音、写真どり等を担当した。もともと機械に強いわけでもないが、必要に応じてこなしていかなければならない。だから、失敗もあった。ある時は、パワーポイントのセッティングを完了し準備万端と思っていたら、セットしたパソコンにはパワーポイントのソフトが入っておらず、あわててパソコンを交換したこともあった。ある時は、録音ミスは許されないと、AV機器に2本、ラジカセに1本、ボイスレコーダー2本を用意して対応したこともあった。

しかし、この失敗・ミスが大切で、ミスすることで理解を深め次につなぐという前向きな精神で対応していった。

こうしてこの1年、新たな業務が加わり、毎日・毎週・毎月・毎年のルーティンワークとイレギュラーの業務を行っていった。

私は、名古屋市の職員、責任者、インフォメーション担当者との連絡報告は忠実に行った。ミスや不備は先延ばししないですぐ報告相談し、次の指示を待つという態勢でいた。業務も多岐にわたっているので煩

雑にならないよう私用のスケジュール表を作成した。出勤日とともに、いつ・どの業務を行なうか記入していった。

毎日、毎週のルーティンワークは別として毎月のルーティンワークは12ヶ月記入し、決定した毎年の業務も記入した。そしてイレギュラー業務はその都度記入していった。

私の休みと重なる業務がある時は、前倒しで行っておくか責任者にカバーしてもらえよう依頼した。終了後は~~済~~のチェックを入れ消していった。

今回の報告のテーマ「“ひっぱりだこ”への対応」というと、私がいかに人気者であるかのように取られるが、実は「多岐にわたる業務への対応」と言い直したほうがいいのかもわからない。タコ足配線のイメージとして捉えてもらいたい。省エネコンセントをご存知だろうか。各々コンセントはつけたままだが、必要に応じてスイッチをON・OFFするというすぐれものである。そのコンセントのようにひとまず業務のコンセントは入れるがスイッチをON・OFFし切り替えながら作業に集中するというイメージがわかりやすいかもしれない。

その切り替えをスムーズに行う対応策として私のスケジュール表と関係者への報告・連絡・相談（ホウ・レン・ソウ）をきちんと行うことだとこの1年を通して確信した。

著／明石雅世



# ワークシェアリングの光と影

私たちは、センター1階にある1室を事務室として使用している。その事務室の扉を入ってすぐ左側に、スタッフのネームカードなどを入れる個別の引き出しと、勤務時間を記入するファイルが置いてあり、今のところ、その数ざっと23名分。

「ええ〜?!?そんなにスタッフがいるんですか?」と大抵驚かれるし、私自身も時折、その状況を確認にすごい、と思うことがある。スタッフの年齢は10代(大学生)から70代まで。数人の大学生を除けば、ほとんどが一旦主婦として仕事から離れた経験のある女性ばかり。それぞれ子どもの年齢もさまざま。自称「もう子育ては卒業した」女性もいるし、親の介護が必要な女性、シングルマザー、社会人大学生など、立場や経験も実にバラエティに富んでいる。それから貴重な男性スタッフも1人。

一人ひとりが、間違いなく私たちNPO法人にとって、かけがえのない財産であり、信頼し、頼りになる存在だ。少なくとも私は、そう思って皆さんと仕事をしている。

「ワークシェアリング」によって多様な働き方、柔軟な仕事への関わり方を可能にした今の職場環境は、もともと望んで作ったものだし、そのメリットを十分に生かした職場にしたいということも、常に私の心にある。その理由は何より、自分が、このシステムで社会と再びつながった人間だからである。私自身が、おそらくこういう職場でなければ、社会復帰はまだ果たしていなかったのではないかと思う。もしくは社会復帰をしたところで、小さな3人の子ども

の病気続きで、辛く、肩身の狭い思いをしながら働いていたか、今ごろ職を転々としていただろう。それは大げさではなく、4年間のNPO活動を通じての実感だ。

さて、日本の社会全体に目を向けたとき、「ワークシェアリング」という働き方は、いったいどの程度広まっているだろうか。雇用情勢が厳しい現在の社会で注目を集めて、どのくらいいたつのだろうか。不況における雇用維持、あるいは雇用創出の救世主のように現れたものの、日本の企業への導入は、依然として遅々とした歩みに見える。そして正規職員と、非正規・パートの間にはそびえる壁は、未だにとても高いままだ。新しいシステムの導入には難しい面も多いのだろう。「時短」「ワークライフバランス」「ダイバーシティマネジメント」等々の言葉や、それらへの取り組みが全く聞かれないわけではないが、私でも簡単に手が届きそうなところにまで、そういうシステムが浸透するのは、まだまだ遠い未来の、夢のような話に感じられてしまう。

そんなことを考えながら、もういちど目を、私たちNPOに戻してみる。私たちは指定管理者業務での、スタッフの働き方をどのような仕組みにするか考えた際、「6名程度で、全員正規スタッフ」よりも、今の「約20名でワークシェアリング」を選択した。既にある仕組みを変えるより、新しいものを創り出す時のほうが、色々と斬新なことには取り組みやすい。そして、NPO法人という組織ならではの動きやすさもあるだろう。この仕組みで、1年が過ぎた。

その結果は、まずまず合格点をもらえるのではないか。次に、私たちの実践したワークシェアリングの「光と影」を、ごく簡単に検証してみたい。

まずはメリットを。交代性勤務で、ライフスタイルに合わせた勤務形態を選択できること。主に日中しか働けない、子どもが小さいスタッフと、学校が終わってからしか働けない学生スタッフとで、昼夜のバランスが取れている。それから複数のチーム制をとって業務分担をしていること。それぞれが何に従事しているのかという「ジョブディスクリプション」を明確にしているので、仕事量のバランスが取りやすく、その仕事に対する責任も明確だ（言い添えると、私を含めて4人の「責任者」がいて、日々の業務に関する決定権と責任をもつが、それがイコール、スタッフの上下関係ではない）。さらに、年代や経験の異なるスタッフが生み出す「多様性」もメリットである。アイデアが沢山生まれる。来館者に対して、個性を生かした対応ができる。スタッフ同士、身近にロールモデルや人生の先輩がいることで、刺激になる、などもある。それから最後に、そして私にとっての一番のメリットは、上述したけれど、個々の生活にいやおう無く生じる仕事以外の「負荷」を、お互いに支えあいながら業務を進めるといふ、支えあいの意識を共有しているということだろうか。それが、ワークシェアリングで生じがちな「好きな時に、好き勝手に働く」という意識ではなく、「できる時に、最大限のエネルギーで取り組む」といふ、支えあいに基づいた、スタッフのモチベーション維持につながっている気がする。

それからデメリットも。組織としての一

番のデメリットは、やはり交通費・研修費・社会保障などの人件費にかかわるコストが人数分かさむことだろう。限られた予算の中で人件費を分配するので、マネジメントの担当者は予算管理と月々の処理が大変だ。もちろん仕事は時給制（月給のスタッフもいる）で、大枠の決まりはあるが、作業量は人数分、掛け算で増える。加えて、経済的に十分自立できるスタッフというのも、残念ながらない。それは、指定管理者業務が有期契約であるという側面もあり、難しい選択だと思う。またスタッフが多いと、日々の業務の引継ぎや、周知のために使うエネルギーも当然多い。そして、私も含めて、負荷を負ったスタッフが多いということは、「子どもの病気」「家族の看護」などで穴が開く可能性が多いということでもある。こんなところがデメリット、つまり、乗り越える課題になってくる。

そして、2年目。前年度のシステムの大枠のところは踏襲して、若干、微修正を加えてスタートしている。この1年で認識した課題への解決をすべく、新しいやり方も取り入れた。気取った言い方だけれど、私たちの新しい働き方への挑戦は、まだまだこれから続くのだ。

この取り組みが今後どう展開し、どんな形でご報告できるのかはまたどうぞ、お楽しみに。そして、この報告書を手になされ、お読みくださった皆さまへ。名古屋へお越しの際は、是非センターの、指定管理者事務室へお越しく下さい！「ワークシェアリングの光と影」を、垣間見ていただけのことと思います。個性豊かなスタッフ一同、心よりお待ちしております。

著／中村奈津子

# わたしのプチ・チャレンジ

NPO 法人参画プラネットが、名古屋市男女平等参画推進センターの指定管理者としてスタートをした平成18年は、私にとっても新たなチャレンジやたくさんの経験をした貴重な年となりました。その中でも、何十年ぶりの学生生活は、「知力」というより、「体力」に挑んだ大きな体験となりました。

ひょんなことから、私のプチ・チャレンジは始まりました。センターの講座受講者の方から、再チャレンジ施策の一環として、愛知県立名古屋高等技術専門学校にマザーズ・ビジネス科が新設されるにあたり、参加者を募集しているとのお話を聞いたのが発端でした。マザーズ・ビジネス科では、主に、子育てや介護などで一旦職を離れた人を対象に、再就職のためのパソコン資格取得を目指すとの事。開校日は目の前、空きもわずか…。うーん、どうしよう。仕事にパソコンスキルは、今や必須条件。しかし、学校と名がつくことから、当然授業は毎日あります。マザーズ・ビジネス科のため午前中のみですが、週のうち2~3日は、授業の後、つながれっとNAGOYAのスタッフとしての勤務が待っています。通学にも往復2時間はかかってしまいます。背中を10回くらい押されても、なかなか一歩が出ないタイプの私。そんな中、仲間の後押しや、決断に余裕がない事も手伝って、えいっと入校を決意したのでした。

初めのチャレンジは、タイピングでした。何となく両手でキーボードを打っていたも

のの、指使いはめちゃくちゃ、ブラインドタッチなんて程遠いレベルからのスタートです。常日頃から、努力する事の大切さを伝えたく、子どもたちに「壺の話」を何度となく話してきましたが、「壺の話」とは、何かにチャレンジするごとに神様は一つの壺を与えてくれる。少しずつ努力を積み重ねるごとに壺の水は貯まっていくのだけれど、いっぱいになるにはとてもたくさんの水が必要で、一筋縄ではいかない。何度も諦めかけながらも、努力を続けると、あるとき、わぁーっと壺の水は溢れ出し、努力は実り花開く、という話。) そう簡単に結果は出ない、これこそ継続は力などと分かっている、なかなか動かない指に、今日はパスしようかなあ…とってしまう軟弱者でしたが、毎日毎日リフティングの練習を続けていた息子を思い出し、襟を正す毎日でした。それと平行して、Microsoft Office Specialist の資格取得に向けての勉強です。Word、Excel の Specialist はそこそこスムーズにこなせたものの、Excel の expert にチャレンジするやいなや、意味難解なテキストにお手上げ状態、先生には何度も何度も同じ事を質問していた気がします。それでも、何とかキーボードを見なくても文字が打てるようになり、3つの資格試験にも合格できたのは、同じ時間を共有した仲間からの支えや励ましがあったからでしょう。

家庭や仕事を抱えながらの学生生活は、結構大変でしたが、このプチ・チャレンジは私に多くの成長を与えてくれました。パ

ソコンスキルはもちろんの事、自分の強味、弱味を再発見する事もできたし、頑張ればなんとかなるという自信もつきました。そして、学ぶ楽しさを思い出しました。

「Excel の expert を一回で合格するなんてすごいことなんですよ！」という先生の言葉を思い出します。私にとって、次へのステップをめざすパワーとなる一言でした。

考えてみれば、忙しすぎる現代人にとって、自分のスキルアップのために時間を費やせるという事はとても贅沢な事なのかもしれません。参画プラネットでは、そんな

個人のステップアップの意思を尊重し、応援してくれます。だれかが休んでも、他のだれかがカバーできる仕事のしくみがあり、みんなが支えてくれます。もともと日本の中にも、チャレンジできる環境が整えられ、意識が根付いていけばいいと思います。そして、培ったスキルを仕事に還元できれば、こんなにうれしい事はありませんし、支えてもらった私が、今度は次の人たちのチャレンジを応援できるよう、ますます自分磨きに精進したいと思います。

著／高島由美子

## 「資格にチャレンジ！」

(ウェブ・サイトより転載)

### —あなたが、取得した資格は、何ですか？

Microsoft Office Specialist (Word) Microsoft Office Specialist (Excel)

Microsoft Office Specialist Expert (Excel)

### —なぜ、その資格を取ろうと思ったのですか？

パソコン技術の向上、特に仕事で会計業務を担当するにあたり Excel のスキルが必要だったためです。

### —資格取得のために、どんな準備をしましたか？

再チャレンジ支援の施策に伴い、愛知県立名古屋高等技術専門学校に新設されたマザーズ・ビジネス科に3ヶ月半通学し、勉強しました。

自宅での勉強はなかなか時間がとれず、ほとんどしていません。そのかわり、学校の授業は子どもの発熱で休んだ2日間以外のすべてに出席し、授業に集中するようにしました。

さすがにExpertの試験1週間前は、自宅でも1日に2～3時間ずつ勉強しました。「資格取得のために勉強をしていること」を家族に伝え、子どもには背中を見ていてくれるといいなという思いでした。多分分かってきていたのではないかと思います。勉強中は静かにしていただきました。

### —資格取得のためにかかった経費は、いくらでしたか？

愛知県立名古屋高等技術専門学校マザーズ・ビジネス科の授業料は無料でした。

テキスト代として、18,500円程度かかりました。

\* つづきは、<http://www.sankakudo.net/>にてご覧ください。